

## 農薬による健康被害(1)

# 農薬大国日本 — 知らずに摂取している農薬

日本は世界でも有数の農薬使用大国であるが、農薬が人の健康に及ぼす影響については、あまり知られていない。農薬の人への影響は急性中毒だけでなく、最近数十年の間に、微量な農薬による慢性影響が注目されるようになった。日々食べ物から摂取し、大気から取り込む農薬の子どもの発達や免疫への影響が問題とされている。

### 農薬使用大国の日本

日本は世界でも有数の農薬使用国である。1950年代以降の半世紀以上、日本は狭い国土に大量の農薬を投入してきた。図1は主要国の農薬使用量(kg/ha)を示す。

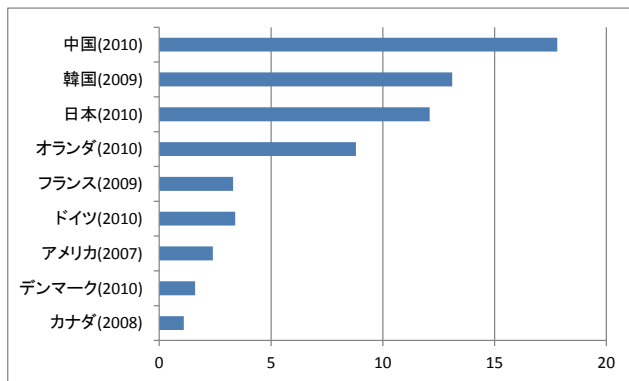


図1:耕地面積あたりの国別農薬使用量(kg/ha) (カッコ内はデータ年次)

Active ingredient use in Arable Land & Permanent Crops (耕地面積当たりの有効成分換算農薬使用量)(資料: Faostat 2013.8.4)

### 知らずに食べている農薬

それでは、日本では普通にスーパーで売っている野菜や果物にどれほど農薬が使用されているのだろうか。表1は、慣行栽培での農産物防除暦の一例である。この例では、トマト64回、ナス66回、イチゴ65回農薬が散布使用されている(散布回数とは、農薬成分の回数で、同じ日に殺菌剤を1成分、殺虫剤を1成分使用すれば2回になる)。農作物が店頭に並ぶまでに農家は何回も農薬を散布するが、そのことをほとんどの消費者は知らない。そして、輸入の農作物は危険だが、

品目	農薬使用回数
水稲(早生)	22回
水稲(普通)	24回
ほうれん草	8回
キャベツ	16回
ブロッコリー(秋冬)	18回
ブロッコリー(春)	34回
なす(夏秋)	34回
なす(促成)	66回
いちご	65回
トマト(促成)	64回
トマト(夏秋)	48回

国産は安全と思い込んでいるのではないだろうか。この表が示すように、わが国では農薬の過剰散布と見られる状況が続いている。

### 農薬の毒性

農薬の毒性として近年注目されているのは、内分泌かく乱作用である。これは「環境ホルモン」として大きな話題になった。1998年、当時の環境庁は環境ホルモン物質として37物質を指定したが、その約半分は農薬である。このように多くの農薬はホルモンかく乱作用を持つが、それだけでなく免疫系や神経系への毒性もあることが近年明らかになっている。

有機リン系農薬やネオニコチノイド系はそもそも昆虫の神経系を攻撃して害虫を殺す目的で開発された。ネオニコチノイド系農薬は「害虫は殺すが人間には安全」ということで販売が促進されてきた。しかし、実は昆虫も人間も神経系の基本は同じで、神経伝達物質であるアセチルコリンやグルタミン酸などは両者に共通した物質である。現在、私たち日本人が食べている農作物のほとんどに、そして家庭用殺虫剤やガーデニングの薬剤などにも人の神経系に影響を及ぼす可能性がある有機リン系やネオニコチノイド系農薬が使用されている。

米国では現在、専門家が真剣に子どもへの農薬の危険性を議論し始めている。2010年、米ハーバード大の研究チームは有機リン系農薬を低濃度でも摂取した子どもは注意欠陥多動性障害(ADHD)になりやすいとの結果を発表し、発達途上にある子供の脳や神経系は農薬の影響を非常に受けやすいことが明らかになった。

このニュースは日本でも報道(2010.5.18 朝日新聞)されたが、世界でも有数の農薬使用国日本で、その後、農薬から子どもたちを守るための対策はとられていない。

(参考:月刊保団連2014.No.1166号 水野玲子氏報告)